

恋に落ちたコンシエルジュ

目次

恋に落ちたコンシェルジュ

5

あなたが帰る場所

267

恋に落ちたコンシエルジュ

「今夜の歌舞伎のチケットを取ってもらいたい。いわゆる『かぶりつき』といわれる席がいいんだけど」

フランスからの常連客が、コンシエルジュデスクにくるなり、そんなリクエストを持ち込んできた。

「はい、かしこまりました。ただ今お調べいたします」

彩乃はにっこりと微笑み、さっそく備えつけのパソコンに文字を打ち込む。その後ろからやってきた海外からのお客様が、隣にいるコンシエルジュに真剣な顔で耳打ちする。

「本物のニンジャに会いたい。どうにか会う約束を取りつけてもらえないだろうか」

お客様の要望は多種多様。たとえそれが非常に困難なことであっても、誠心誠意応えるのがホテルコンシエルジュだ。決して最初から“NO”とは言わない。

コンシエルジュは元々はフランス語で、門番とか管理人を意味する言葉である。それから広がり、ホテル業界においては、お客様のリクエストに応えるよろず相談係といった意味合いを持つ職の名称となった。突拍子もない要求をされても、一流コンシエルジュは決して慌てない。必ず一度承

て、その上で最善を尽くす。

桂木彩乃、二十七歳。大学在学中にホテルコンシエルジュになるという夢を抱き、卒業後はかねてから希望していた“ホテル・セレーネ”に就職した。ここは、外国からの宿泊客も多い、いわゆる高級ホテルだ。入社して最初の二年間はフロントや客室係をはじめとする、ホテル内のありとあらゆる部署を経験した。そして三年前にようやくコンシエルジュ部門への異動が決まり、晴れて夢のスタート地点に立つことができた。

それ以来、彩乃は自分が理想とする一流コンシエルジュになるべく奮闘し、日々努力を重ねているのだ。

長かった夏もようやく一段落した九月のある木曜日の朝。まだ五時半という早い時間ながら、開け放った窓の外からは、道ゆく人の足音が聞こえてくる。

彩乃の住むアパートは、最寄駅から徒歩三分、通勤時間約三十分と好立地なところにあつた。しかも洋間七・五畳とキッチンで家賃六万五千円となかなかの優良物件だ。就職した当初は東京下町にある実家から通っていたが、利便性を考えて二年前からここで一人暮らしを始めた。

洗面所で彩乃は、勢いよく顔を洗い、寝癖のついた髪の毛を指で軽く梳く。

「うわぁ、前髪、変な癖がついちやってる」

たぶん、うつ伏せになったまま眠りこけたのだろう。前髪は、生え際からまっすぐに上に折れて、額が丸出しになっている。

鏡に映るたまご型の顔は、不器量ではないけれど、どうみても今時の顔をしていない。パーツの出来は悪くないけど、全体的に地味なレトロ顔なのだ。

(相変わらず広いおでこ)

彩乃は、額ひたいにコンプレックスがある。ちよつと面積が広すぎるのだ。しかも、ただ広いだけではなく、ちよつとばかり前に突きだしている、いわゆる「でこつぱち」だ。

小学生のころ、男子に「でこつぱち」とからかわれて以来、彩乃は決して額ひたいを出さなくなってしまうた。その日までは、前髪を髪留めで押さえ、全開にしていたのだけれど――

そうして、早十年以上。そのままなんとなく前髪を下ろし続け、今や人前で額ひたいを出さなんて冗談じゃないと思うまでになってしまっている。

「広い。確かに広いよね、これ……」

前髪を水で濡らし、寝癖を完全にリセットした。それからドライヤーで後ろの髪をまつすぐに伸ばして、耳朶みみたぶの高さでひとまとめにする。

朝食を食べた後、ニュース番組をチェックしたらもう出発の時間だ。玄関ドアに向かい、壁にかけた鏡を覗き込んで軽く頷く。

「前髪、よし！」

おでこチェックは、出掛ける前の日課だ。

いつかまた、前髪を上げて外を歩く日がくるのか？ この広すぎるおでこを褒めてくれる男性にめぐり会うことはあるのか――

前髪に寝癖があった朝は、ついこんなふうに考えてしまう。

仕事に集中していてもあまりにも恋愛から程遠い日常が続いているけれど、いつかは素敵な人と出会って、真つ白なウェディングドレスを着て結婚式を挙げたいという願望はある。

そして、その愛する人とともに、前髪の寝癖など気にせずおでこ全開の素顔でくつろぎたい……なんてことをぼんやり思った。

彩乃が勤務する「ホテル・セレーネ」は、東京の中心地にある。ビルは地上三十七階で、部屋数は二百九十室。入り口を入ると、正面にフロントとコンシェルジュデスクが並び、右手には壁一面に窓を配した、広々としたハワイエとカフェラウンジがある。

ラウンジを基調にした内装は国内有名建築家の監修によるもので、インテリアから大理石の床に映る館内の光に至るまで、すべてが計算しつくされている。

ホテル利用者の約六割は外国からのお客様だ。コンシェルジュという職業について知識があり、ホテル滞在中のよき相談相手と思ってくれている彼らに声をかけられる機会が多い。

慎重で真面目な性格の彩乃は、今の部署に就いてからまだ大きな失敗をしたことがない。だけど、先輩コンシェルジュたちのように「あなたがいるホテルだから」という理由でできてくれるような顧客がいるわけでもない。

つまり、お客様からいただいたリクエストに対して「可」ではあるけれど「良」でも「優」でもない対応しかできていないのだ。

このままではいけないと思うし、上司にもそう指導されている。

こんな状態から抜け出して、コンシエルジュとしてワンランクアップするにはどうしたらいいのか――

そんな悩みを抱えながら、彩乃は今日もフロントのすぐ横にあるコンシエルジュデスクにスタンバイをする。

コンシエルジュは全部で七人いるが、デスクに常駐するのはふたりだ。バックルームに控えのスタッフがいるとはいえ、基本はふたりだけで、やってきたお客様全員の担当をする。

今日のパートナーは、頼りになる先輩コンシエルジュの袴田健一^{はかまたけんいち}だった。

『桜庭様のタクシーが到着しました』

フロント横にある置時計が八時を指すころ、インカムを通してドアマンから連絡が入った。それを聞いて、彩乃は調べ物をしていた手を止めて入り口に視線を向ける。

（ああ、いよいよだ！）

桜庭雄一^{おうだいらゆういち}。

現在三十二歳の彼は、世界的に有名な旅行家であり、人気ライターでもある。

両親とも日本人だが、父親の仕事の関係でロンドンで生まれ育ったという。その後日本の大学に進学して、今はロンドンに拠点を置いて世界中を飛び回っている。英語と日本語はもちろん、ほかにも数か国語に精通しているらしい。彼が書いた『世界紀行』なる旅行記は、イギリスで出版され

るとたちまちベストセラーになり、今や三巻目が出る人気シリーズだ。

現在それは三十を超える国で翻訳出版されており、いずれの国でも好評を博している。彼自身の知名度はここ日本でも相当なもので、その容姿や人柄のよさから各種雑誌で特集記事を組まれるほどの人気ぶりだ。

その彼が、今回取材のために来日して、ここホテル・セレーネに二週間滞在する。宿泊の予約は、仕事の依頼主だという出版社が入れていた。指定された部屋は、見晴らしのいいデラックスルームだ。

普段から趣味と実益を兼ねた読書家である彩乃だけど、あいにくこれまで彼の本を一冊も手に取ったことがなかった。彼の宿泊を知らされ、彩乃は慌てて本屋に駆け込んだ。そこで三巻とも買い、読んでみたのだが――これが実に面白い。

（世界にこんな素敵な場所があるなんて知らなかった！ それに、こんな素敵な旅をする人がいるなんて！）

彼の著書を読んでからというもの、彩乃はその魅力にとりつかれ、どっぷりはまっていた。

一巻目、紅海^{こうかい}に面した小国で秘境を旅するところからこの本は始まる。旅をスタートしてすぐ、彼は現地の住民と、三か月もの間一緒に暮らしている。その後アフリカ大陸を横断し北大西洋側に向かい、仲良くなった住人と湖のほとりですばらく一緒に生活していた。そこでは、塩の採取に携^{たづな}わっている。

一見計画性のない放浪に思えるのに、読み終わってみれば、彼が旅の目的としていたものが伝

わってくる。飾らないそのままの生活を現地の人とともに送ることで、彼は世界を体感しているのだ。

二巻目は中南米を、三巻目は海に浮かぶ島国を転々と巡っていた。今回の日本滞在は、きつと四巻目のどこかに書き記されるのだろう。

(本も素晴らしいけど、彼自身も……ねえ)

桜庭雄一の魅力は、その文章力だけではない。彼はかなりの美男子でもあった。東洋人にはあるものの、どこことなく日本人離れしており、そこからは西洋的な美しさも感じられる。全体的に彫りが深く、それぞれのパーツはどれをとっても非の打ちどころがない。笑うと親しみやすい顔つきになるけれど、真面目な表情をすると男性的な色気があふれる。

イギリスのゴシップ記事を賑わしたことも一度や二度ではないらしい。芸能人ではないものの、間違いなく海外セレブであり、名うてのプレイボーイといったところだ。

(絶対に素敵な人よね。でも、浮かれちゃだめ)

そんな彼は、職業柄、世界中のホテルに精通しているはずだ。それにホテル側にとって、絶対に粗相があつてはならないお客様といえる。

(さあ、気をひきしめるのよ、彩乃！)

『桜庭様、ホテルに入られました』

ドアマンからの追加連絡が入った。

それと同時に、入り口のドアが開き、背が高く飛びぬけてスタイルのいい男性がひとり、フロア

に入ってくるのが見えた。紺色のジャケットに、白いコットンパンツ。なんでもない格好なのに、それが驚くほど似合っている。

(うっ、わあ。超絶的なイケメン……！)

彼は、ゆっくりとフロアを見回し、それからまっすぐにこちらに向かって歩いてきた。

ホテル・セレーネでは、フロントからそのまま繋がった形でコンシェルジュデスクを配置している。この配置ならコンシェルジュを利用したくない人でも、チェックインなどのついでに気軽にデスクを訪れてもらえるためだ。

雄一は、フロントではなく先にコンシェルジュデスクに立ち寄るようだ。

(どうしよう、近づいてくる……)

今回の取材に関することで、なにかリクエストでもあるのだろうか？

今デスクに就いている彩乃と袴田、両者とも手は空いているし、受け入れ態勢はできている。どんなに胸がドキドキしていようと、彩乃はプロのホテルコンシェルジュだ。それに彩乃とて、著名人と言われるお客様を何十人と相手してきた経験がある。雄一のような素敵すぎるお客様相手であつても、緊張することはない。

だけど――

雄一から、なぜかものすごい圧迫感を感じる。まるで大きな波が打ち寄せてくるような、そしてそれに呑み込まれて前後左右の感覚を失ってしまうような――

近づいてくるにつれ、雄一の視線がまっすぐに彩乃に向けられていることがわかった。その口元

には、魅惑的な微笑みが浮かんでいる。

（わわっ、こっちを見てる？）

彩乃の前に、雄一がたどりつく。髪の色は黒に近い焦げ茶で、瞳は綺麗なヘーゼル色だ。信じられないほどハンサムで、圧倒的なインパクトを持った男性。

その彼が、デスクの上に軽く肘をついた。視線が彩乃の胸元に下がり、フルネームが表記された名札で留まる。微笑んでいるものの、その目力は半端なく強い。

彩乃の心臓が、人知れず喉元まで跳ね上がった。これほどの男前と、こんなに近い距離で対峙したことなど一度もない。必死で穏やかな微笑みを浮かべる努力をしてはいるものの、心はもう大パニックだ。かけるべき歓迎の言葉がまったく出てこない。

「桜庭様、お待ちしておりました。ようこそホテル・セレーネへ」

隣にいる袴田から、穏やかな声が聞こえた。その声には、はっと我に返る。彩乃が慌てて雄一に挨拶しようとした瞬間、デスクの縁に置いていた彩乃の手が、持ち上げられた。手を取った雄一は、そのまま自身の口元へひきよせる。

「はじめまして、桂木彩乃さん。——さあ、俺と恋をしようか」

「はい……っ？」

彩乃は大きく目を見開いて、小さく声を上げた。

目の位置に持ち上げられているのは、間違いなく自分の指先であり、そこに触れているのは、真正銘、桜庭雄一その人の唇だ。

（キ、キス……！ 手につ……キスされっ……）

ドラマや映画で幾多の劇的なシーンを見たことはあっても、実際に自分の身にそんなことが起るなんてあろうはずもなかった。

（なんの冗談？ からかわれてる？ だとしても、なんで私っ？）

動転しすぎて、なんの反応もできない。

しかし、そんな彩乃の反応をまったく意に介さず、雄一の目がゆつたりと細められた。そして、おもむろに彼の唇が、彩乃の指先から離れる。

「ごめん、驚かせちゃったかな？ でも、今言ったことは本気だから」

（ほ、本気って……！ なにそれ！ 余計わけわかんないっ……）

ようやく我に返り、彩乃は急いで手を引いた。その様子を見て、雄一はおかしそうに口元を緩める。

「……っ……よ、ようこそホテル・セレーネへ」

精一杯の作り笑顔で、ようやく絞り出した返答がこれ。あまりにも間抜けな受け答えに、自分ながら情けなくなってしまう。もっと気の利いた返しがあるのかもしれないが、これが二十七歳にして彼氏がいたことがない彩乃の、精一杯のレスポンスだった。

彩乃がおろおろしていると、袴田が助け舟を出してくれた。彩乃に代わり雄一のチェックインをすませ、後ろに控えているベルマンに目で合図を送る。

「ああ、荷物は自分で運ぶよ。それと、部屋の案内は彼女に頼みたいな」

雄一が彩乃を示すと、袴田とベルマンから同時に視線を向けられた。

そこでようやく、彩乃の頭が働き始めた。なんということだろう。突然のことに驚いたとはいえ、ただ棒立ちになって事の成り行きを眺めてしまうなんて。

「か、かしまりました。桜庭様、お部屋までご案内させていただきます。どうぞこちらへ」

それまでの失態を挽回しようと、彩乃はカードキーを持って、雄一のそばにいった。彼の身長は、明らかに百九十センチを超えている。見上げるほどの背の高さ、とはこのことだろう。

フロントを横切り、フロア左手にあるエレベーターホールへと向かう。

(なにか話しかけなきゃ……)

雄一の斜め少し前に身を置き、今度こそなにか気の利いたことを言おうと必死で考える。ぎこちない笑みを口元に浮かべながら、彩乃は頭をフル回転させた。初対面で突然「恋をしよう」だなんて変なことを言われたけれど、彼がこのホテルにとつて大事なお客様であることは事実なのだから。そもそも、さっきのセリフだって、彼にしてみればただの軽い挨拶だったのかもしれない。というか、そうに違いない。なにせ彼は、こんなにも魅力あふれる外見の持ち主で、有名人で、そして海外で名の知られているプレイボーイだ。それくらい誰にでも普通に言っているのだろう。

(私、なんて恥ずかしい反応をしてしまったんだろう！ 冷静に考えればわかつたはずなのに……)

こんなイケメンが、自分なんかを本気で相手にするわけがないではないか。

全部で六機あるエレベーターのうち、一番奥にある扉が開いた。頭でぐるぐる考えるだけで結局一言も言えないまま、彩乃はエレベーターに雄一を誘導した。案内する客室は、二十三階にある。

さつき唇を当てられた指先が、まだ火照っている。背後から感じる彼の視線が、チクチクと背中突き刺さるようだ。彩乃はなんとか口元に笑みを浮かべ、必死で動揺を隠して軽く視線を合わせてみた。

改めて見ると、本当に整った顔立ちだ。正直目のやり場に困るし、心臓が妙に高鳴って仕方がない。

(ああ、いったいなにやってんの、私——)

きっと彼は、ちょっとした挨拶に対してこれほどぎこちない反応をされて、戸惑っているに違いない。いや、もしかすると、こんな反応にすら慣れっこになっているのかもしれないけれど。

(なんだこいつ、とか思われてるんじゃないかな？ 思われてるよね、絶対。うわあ……)

「その制服、君にすごく似合ってるよ」

「はいっ？」

いきなり話しかけられ、つい突拍子もない声を出してしまった。

「あ、ありがとうございます」

慌ててお礼を言い、その場を取りつくろう。

ホテル・セレーネの女性用制服は、黒のジャケットに同色のボックススカート。職種によってはパンツスタイルも選ぶことができる。ジャケットのなかは白のシャツを着用し、襟元にはスカーフを結ぶ。彩乃自身、気に入っているデザインだ。

だけどその制服をせっかく褒めてもらったのに、その後の会話が続かない。いつもなら、もっと

そつなく対応ができるのに、指先に残っている熱が、平常心を取り戻す妨げになっている。

「もしかして緊張してる？ さつき俺が言った言葉のせいなら謝るよ。ごめん」

なんとか言葉を継ごうとした矢先に、またしても先に言われてしまった。

「あ、いいえっ……。そんなことはありません。……あの、桜庭様は大学の四年間以外はずっとロンドンにお住まいだと伺っておりますが、今日もロンドンからお越しですか？」

よし、なんとか長くしゃべれた。

（この調子だ、彩乃。今がスタートだと思つて、頑張れ！）

「ああ、そうだよ。両親は俺が生まれる前からイギリスに移り住んでいたし、生活の基盤はすっかりあつちだからね。でも、家では常に日本語優先の環境で育つたんだ。物心ついたときから、毎月何冊も日本語の本を読まされてね。それがずっと習慣になつて、今でも読む本の半分は日本語で書かれたものだよ」

「そうでしたか。イギリスにいながらにして、そこまで完璧な日本語をお話しになるには、やはりそれなりの努力が必要だったんですね」

「だけど、やっぱり欠落している部分がたくさんある。難しい言葉や言い回しを知っていても、逆に簡単な単語の意味や使い方がわからなかつたりすることもあつたりしてね」

そうだとしても、これほどしゃべれたらなんの不自由もないだろう。

言葉を交わしたことで、彼の顔に浮かんでいる微笑みが、より一層親しげなものに変わった。

（なんて人懐っこい笑顔なんだろう……）

背も高く完璧に近い外見のせいか、人によつては最初、やや威圧的な印象を受けるかもしれないけど、笑うと途端に柔らかな印象になるし、表情自体とても豊かだ。

「今回のご旅行は、取材のためと伺っております」

「ああ、本当はもつとゆっくり地方とか見て回りたいんだけどね。他の仕事が後に控えていて、終わつたらすぐに日本を離れなきゃならないんだ」

「滞在中、なにかお困りのことやご要望がありましたら、なんなりとお申しつけください。スタッフ一同、誠心誠意対応させていただきます」

決まり文句のようでもわざわざ言うまでもないことだが、なぜか彩乃は心からそう告げていた。

エレベーターを降り、フロア奥にある五十平米ほどのデラックスルームに案内する。館内の施設や部屋の説明を一通り終えると、ようやくいつもの調子が戻ってきた。

彼はお客様だ。しかも、旅慣れたセレブであり、上からも特に気を配るように言われているVIP。この際、イケメンであることは頭から取り去つてしまおう。そうでなければ、必要以上にドキドキしてうまく仕事ができない気がする。

「プールはこれから利用できる？」

「はい、二十二時までご利用いただけます」

「そうか、じゃあひと泳ぎしてくるかな」

そう言うが早いのか、雄一は着ていたジャケットとTシャツを脱いで、上半身裸になつてしまった。「桜庭様っ、さすがにここから水着でいらつしやるわけにはっ……」

突然あらわになった上半身から、彩乃は咄嗟に目をそらした。ほんの一瞬見ただけなのに、逞しい筋肉が目に見えついでしまっている。せつかく落ち着いたのに台無しだ。心臓はこれまで以上に乱れまくり、声も調子っぱずれになってしまった。

「ははっ、わかっているよ。その前にちよつと着替えようと思つてね」

雄一の軽やかな笑い声を聞いて、彩乃は耳まで赤くなった。

「す、すみません。私つたら慌てて……」

それもそうだ。ちよつと考えればわかりそうなものなのに、急に服を脱がれて気が動転してしまった。いや、いきなり人前で服を脱ぐことは普通ではないけど、彼はすでにチェックインをすませている。つまりこの部屋は、彼のプライベートスペースだ。

「ちよつと待つて。今着替え終わるから」

「はい……」

壁に視線を向けるが、脳裏に彼のしなやかな筋肉がちらつく。

「はい、もう着替え終わった。こっち向いてもいいよ」

まるで身内に話しかけるような気軽さだ。世界中を駆け回る人が持つ距離感というのは、こうも近いものなのだろうか。

彼の方に向き直る。着替え終わったと言うものの、雄一はシャツを羽織っただけだ。見事な筋肉はまったく隠れておらず、露わになったまま。

「——っ。そ、それでは桜庭様、ごゆっくりお過ごしください」

動揺を押し隠し、退室の挨拶を告げる。

踵をそろえ、軽く会釈した。そして姿勢を直し、ドアのほうへ一歩踏み出す。その途端、ついと伸びてきた雄一の手が彩乃の前髪に触れた。

「あれ？ ちよつと待つて、ここになにかついてる」

引き締まった胸筋が、彩乃の目前に迫る。

「え？ ええっ……?」

小さく声がもれ、驚きのあまり全身が固まってしまった。息が止まり、目が全開に近いほど開いているのを感じる。耳の奥にうるさく聞こえるのは、心臓の音だ。家族以外の、しかもこんなイケメンの裸の胸元が目の前にあるなんて。こんな状況に陥ったのは生まれて初めてだった。

「……なんだろう。なにか綿毛みたいなものかな?」

緩く髪を引っ張られるまま、少しだけ顔を上向かせた。下から見上げる彼の顎のラインが綺麗で、そんな場合ではないというのに、つい見惚れてしまう。

「おでこ、広いんだね。前髪、上げたほうが似合うんじゃないかな」

気がつけば、下ろしていた前髪を全部上げられ、額を全開にさせられていた。

「ひゃっ!」

驚いて仰け反った拍子に、身体のバランスを失う。

(た、倒れる!)

咄嗟に目を閉じた彩乃だったが、身体が床にぶつかるとはなかった。気がついたときには、雄

一の腕にすつぽりと抱え込まれていたのだ。目を開けると、ヘーゼル色の瞳の模様までわかるほどの至近距離に、彼の顔があった。身体はびったりと合わさっている。

(ち……近いっ！)

身体じゅうの産毛うぶげが総毛立ち、脳味噌がスパークする。

「わっ、私ったら、あ、ありがとうございます！」

礼を言っただけで、あ、ありがとうございます！と、雄一は彩乃の身体を離そうとしない。

「あ、あのっ、桜庭様っ……！」

「ふうん、可愛いおでこちゃんだな。出していたほうが断然可愛い。なんで隠してるの？」

「お、おで……っ？ えっと……！」

いきなり額ひたいの話？ そんなことを聞かれても、今の状態ではなにをどう答えていいのかもわからない。

「それに、すごく綺麗な肌だね。きめが細かくて、まるでシルクみたいだ」

「彩乃の混乱をよそに、雄一は彩乃の剥むき出しの額ひたいに、軽く唇を押し当てた。

「……ひ……っ……！」

予想だにしない展開に頭がついていかない。

(な、なにやってんの？ 早く身体を離さない！)

そう思っているのに、遅おそい腕に抱きとめられたまま、身じろぎすらできない。身体のコントロールが利かないだけでなく、あろうことか彩乃の全神経は、額ひたいに触れる彼の唇の感触に集中し

てしまっている。

「うーん、いい香りだ。シャンプーはフローラル系を使ってるね？」

「シャ、シャンプーですか……。しゃんぷー、あ……あの、桜庭さまっ……！」

質問に答えることすらできずに、今度は背中に当たる腕に気をとられる。ほぼ全体重をかけてしまっているのに、彼の腕は微動だにせず、彩乃の身体をしっかりと支えている。

「なんだかすごく落ちてく香りだな……！」

睫毛まげの先に彼の顎あごが触れ、思わず目を閉じる。

ここまで男性と身体を近づけたことは、まったく言っていないほどない。あっても、満員電車や、ぎゅうぎゅう詰めのエレベーターのなかだけだ。ましてや、こんなふうに男性の腕に抱かれるなど……。とにかく、早くこの状況をなんとかしなくては。

彩乃は踵かかとにぐっと力を入れ、まっすぐに立とうとした。すると、余計に身体が傾き、顎あごが上を向いてしまう。その拍子に雄一の腕に力がこもり、彩乃は大きく仰のげ反る体勢となった。

慌あわてて目を見開くけれど、羞恥しゆうちのせいかな、まるで焦点が合わない。必死になって瞬まばたきをするうち、唇になにか温かいものが触れたような気がした。

(え……？)

ようやく焦点があったと思ったら、眼前に雄一の目がある。瞳の微妙な色合いまでしっかりと判別できる近さだ。それはまるでひとつの天体のようで、見つめ続けると吸い込まれてしまいそうなほど神秘的だった。

「うん……、思った通り、柔らかい唇だな」

触れ合ったままの唇がそう咬き、彩乃を抱く腕の筋肉が硬く引き締まった。身体がぴつたりと密着して、彼のぬくもりを肌を感じる。

「桜……、んっ……」

しゃべりだした唇を、改めて仕掛けられたキスで完全に塞がれてしまった。

いったいなにがどうなっているのか、まったくわからない。パニックの嵐のなか、彼の舌先が入ってきた。決して強引な感じではなく、ごく自然に。彩乃の固く握りしめていた拳が、徐々に開いていく。雄一の長い睫毛、深い瞳の色。その目が、うっすらと細められると同時に、触れ合った舌がゆつくりとからんできた。そして、まるでクリームを舐めとるように彩乃の口のなかをゆるゆると巡り始める。

「ん……ふ、う……」

頭の芯がじいんと痺れて、身体を中心にわけのわからない熱が宿った。呼吸が乱れ、目蓋が勝手に閉じてしまう。キスが立てる密やかな水音が聞こえる。

「……もしかして、こんなキスは初めて？」

雄一の低い声が、そう囁く。

うっとりとした顔になって後、彩乃ははつと我に返り、大きく目を開いた。じたばたと足を動かして、ようやくぴつたりとくっついていた胸を離す。そしてよろよろと後ずさった。

「さ、さっ、桜庭様っ！ いったいなにをなさるんですかっ？」

どもりながらさらに後ろ向きに進んで、ドンと壁にもたれかかる。

「なにつて、キスだよ。嬉しいな、君からキスをしてくれるなんて」

「わ、私から？ ち、違います！ あれは、転びそうになったから、不可抗力で……。と、とにかく、違いますから！ 誤解です。私から、キ、キスとか……し、失礼します！」

ドアに向かって駆けだしたローヒールの踵が、なにもない床面にひっかかった。雄一の手が伸びるのが見えたが、それを振り切り、転がるように部屋から出る。廊下つきあたりのドアを押し開き、非常階段の踊り場に駆け込んだ。

「ふあっ！」

いつの間にか呼吸を止めていたらしく、ひとりになった途端急に息苦しさを感じた。

「なに？ 今のなにっ？ 嘘、嘘、嘘っ……なんでキスとか……もう、信じられないっ！」

頭が完全にパニックを起こしている。いくらお客様とはいえ、あんなことをするなんて到底許されることではない。

しかも、これが彩乃にとって初めてのキスだ。浅い付き合いの男友達はいたけれど、誰ともそんな関係になったことはない。もっと言えば、キスはおろか男性と手をつないだことすらないのだ。

二十七歳にもなって、乙女チックなファーストキスを夢見ていたわけじゃないけど、まさかこんな形で初めてのキスをしてしまうなんて。

「いきなりあんなこと……やっぱ、噂通りだったんだ……プレイボーイ……とんでもないセクハラ男……！ いくら名の知れたイケメンだからって、だからって……」

小さく独り言をいながら、階段を下りる。手すりに掴まっていなければ足元がおぼつかないくらい、気が動転していた。

沸々とわいてくるのは、怒りなのか戸惑いなのか。なにせ脳みそが完全にショートしていて、自分の感情すら把握できないのだ。今やキスの衝撃が全身に影響を及ぼしている。行き場のない混乱に思いっきり振り回されているうち、さつき交わしたばかりのキスが頭のなかに思い浮かんだ。

——確かに、彩乃から唇を押しつける形になってしまったかもしれない。

「でも、もともとあつちがいけないんだからね？　そもそも初対面だし、相手はお客様だよ？　なのにキスとか……ありえない！　なんでこうなっちゃったの？　ああ、もう信じられない〜！」

しばらくパニックに陥っていたが、その興奮状態が収まってくると、なんともいえない脱力感に襲われた。曲がりなりにも男性の腕に抱かれ、初めてのキスを交わした。しかも、ただ唇を合わせるだけじゃないキス。いわゆるディーブキスを、だ。

「やだ、もう……。なにやってんのよ私……」

なぜあのときもつと毅然とした態度をとれなかったのだろう。突然のこととはいえ、冷静になっ ていればこんな事態にはならなかったかもしれないのに。

俺と恋をしよう”なんて言われたのが、そもその元凶だ。

おおかたモテ男が言うちよつとした軽口だろう——頭ではそんなふうに思っていた割には、胸のドキドキが半端なかつたことは事実だ。正直なところ、ちよつと舞い上がってしまった。——もつと言え、不覚にも一瞬本気なのかと思ったのだ。

「あー情けない……。もしかしてこれって、こじらせ女子ってやつ？　やつぱりこの年になって男性経験ゼロってありえないこと？　だつて仕方ないでしょ。忙しくて出会いなんかなし、そもそも別に恋人なんかほしいと思わないし……」

強がりじゃなくて、これは本当の気持ちだ。

今は仕事を頑張りたいし、仮に恋人がいてもデートに費やしている時間的余裕はない。

しばらくブツブツとつぶやいていた彩乃だが、長々と独り言を言っていることに気づき、慌てて口を閉じた。そして手の甲で、唇をこしこりする。

イギリスに生まれ育つたというだけで、無意識に紳士的な人物を期待していた自分が愚かだった。世界中を飛び回る旅行家なのだから、むしろ無頼漢と考えるべきだったのかもしれない。

ホテルを利用するお客様は、みながみなジェントルというわけではない。なかには困った人だっている。旅先で、普段より開放的になっていることもあるだろう。とはいえ、いくらなんでもあの振る舞いはあまりにも自由すぎだ。

混乱したまま、気づけば二十三階から一階まで、階段を下り切ってしまった。だけど、心臓の動きが速いのは階段を駆け下りたためではなく、あのエロティックなキスのせいだ。

フロアに出る前に、立ち寄ったロックスルームで身だしなみをざつとチェックする。案の定口紅は落ちているし、前髪は完全に乱れていた。化粧を直し前髪を櫛で梳かしていると、ふとさつき言われた言葉が頭のなかによみがえった。

“可愛いおでこちゃんだな”

確か、彼はそう言った。

これまでに、その台詞で彩乃の広い額を褒めてくれた人がひとりだけいた。

彩乃が十五歳のときに病気で亡くなった母だ。母は、幼い彩乃の頭を撫で、「可愛いおでこちゃん」と褒めてくれたものだ。

さつきいきなり額を丸出しにされたときはびつくりしたけど、不思議と嫌な感じがしなかったのは、母と同じ言葉を投稿かけられたせいだろうか――

（つて、感傷に浸ってる場合じゃない！ 仕事仕事っ！）

パン、と掌で軽く頬を叩き、背筋を伸ばしフロアに出る。

とにかく、さつきあつたことは忘れよう。つけ入る隙があつた自分にも非があると言えなくもないし、ことを荒立てるつもりはない。あんなふざけた男でも、このホテルにとっては大切なお客様なのだ。

「俺と恋をしよう」だなんて戯言も、不可抗力だったキスのことも、全部ひっくるめてなかったことになろう。

（大丈夫、私はコンシェルジュだもの。職場にいるときは、個人よりもホテルウーマンとしての自分優先）

デスクに戻ると、袴田がちらりと視線を投げかけてきた。そして、お客様が途切れた合間に小声で声をかけてくる。

「さつきは驚いたね。部屋までいって大丈夫だった？」

常に穏やかな袴田の声は、いつだって安心感を与えてくれる。彩乃にとって彼は、新人時代の教育係であり、コンシェルジュのお手本のような存在だ。

「はい、さすがにちよつとびつくりしましたが、もう平気です。ご案内も無事に終えてきました」

「よかった。今後桜庭様との間でなにかあつたら、僕に言ってくれたらいい。できる限りサポートはするし、場合によっては君に代わって対応するから」

「ありがとうございます。でも、きつともう大丈夫です」

力強く頷いて見せると、袴田も首を縦に振ってそれに応えた。

彼は普段からなにかと周りのスタッフのことを気遣ってくれるし、彩乃自身もピンチを救つてもらったことがある。だけど、それに甘えてばかりはいられない。彩乃とて、コンシェルジュになつて三年。降りかかったトラブルを、ひとりで処理できなくてどうする。そう思い、彩乃は改めて姿勢を正した。ほどなくして、コンシェルジュデスクに背の高い銀髪紳士が顔を出した。

「あ、総支配人。お疲れ様です」

目の前の顔が、茶目つけたっぷりな微笑みを浮かべる。

「やあ、ふたりとも調子はどうかな？」

彼はリチャード・エヴァンスといい、七年前にロンドンのとある有名ホテルから引き抜かれ、ホテル・セレーネの総支配人に就任した人物だ。結婚四十周年を迎える彼の妻は日本人で、彼自身日本語がペラペラだった。そのうえ、ホテルスタッフの誰よりも日本文化に精通している。

「はい、なにも問題はありません」

袴田が答え、彩乃もそれに同意して軽く頷く。

「結構。実に気持ちのいい返事ですね」

エヴァンスが満足そうに目を細める。

もう還暦を超えているが、この人からは老いを感じない。彼はかつて、伝説と謳うたわれるほどの名コンシェルジュだったという。彩乃は彼のことを心から尊敬しており、目標としている。

総支配人という立場にもかかわらず、彼はまったくもって飾らない性格だ。暇さえあればホテル内を歩き回り、誰にでも気さくに声をかけている。

「時に桂木君。君にひとつ頼みたいことがあるんだ」

「はい、なんでしょう」

憧れの支配人から、直々に頼みごと？　こんなことは今までになかった。彩乃の胸が期待と不安でドキドキしてくる。

「先ほど到着した桜庭様だが、君にパーソナルコンシェルジュをやってもらおうと思うんだよ」

「私に、桜庭様の、パーソナルコンシェルジュを!?」

ひとつひとつ単語を区切るよう発音して、彩乃は言われたことの意味を正しく頭のなかで理解しようと努めた。パーソナルコンシェルジュ。それはつまり、彼のリクエストを専門に引き受ける担当者になるということだ。

「むろん、他の業務をやりながらだし、他のスタッフにもこのことは承知してもらっておく。業務

の流れもあるが、基本的に桜庭様からのリクエストには君が応えてもらう、という感じになるかな。これは私からの提案であると同時に、桜庭様のご希望でもあるんだ」

彩乃の頬が、ぴくりと引きつる。

「桜庭様のご希望、ですか？」

「うん、そうだよ。桜庭様は君が気に入ったようだ。私も、君が適任だと思っている。君は東京が地元だから、取材のためにいらした桜庭様の担当に合っていると判断したんだがね。どうかかな？　シフトの変更は調整するように言っておくよ」

——桜庭雄一は危険だ。

彩乃の頭の隅で、警告のアラームが鳴る。だけど、そんなことは言っていられない。

総支配人直々に頼まれたことを、断ることなんてできるわけがない。

さっき部屋で起きた出来事は気になるけど、それは彩乃自身が気をつけねばすむはずだ。そうすればあんなことは二度と起きないだろう。

(さっさと頭を切り替える、彩乃。あなたならできるでしょ？　頑張れ！)

心のなかで自分を叱咤する。

それに考えてみれば、彩乃にとってお客さまから指名されるというのは初めてのことだ。しかも、相手はホテルにとって大切な人物。これは、尊敬する総支配人に認められるチャンスかもしれない。「承知しました」

力強く頷き、口角をきゅっと上げる。

「桜庭様のパーソナルコンシェルジュをお引き受けします。そして、引き受けたからには全力で対応させていただきます」

「よかった。では、桜庭様には私からお伝えしておくからね」

エヴァンスがデスクを離れると同時に、袴田がなにか言おうと口を開いた。だけど、やってきた団体客の応対をしなくてはならず、それきりになってしまう。

彩乃は元々人の世話を焼くのは嫌いではなかったし、人のためになにかして、それを喜んでもらうことにやりがいを感じる性格だった。だからこそ、コンシェルジュという職業を選んだともいえる。

コンシェルジュとしての成長をのぞむ今の彩乃にとって、桜庭雄一の件はきつと試練のひとつなのだ。そう考えれば、キスの件もすっぱりなかったことのできる気がする。いや、そうでなければ困る。彩乃は、半ば無理やりそう自分を納得させて、目の前の仕事に没頭した。

ホテル・セレーネは四勤務形態のシフト制になっており、桜庭雄一がやってきた次の日の彩乃は、十二時半から二十一時までの勤務だった。桜庭を迎えた昨日のように七時から入る場合は、終わりが十五時半。十四時半からのシフトだと二十三時までで、二十一時からの夜勤に就く場合は、翌朝八時までが勤務時間だ。

彩乃は、雄一が滞在している期間中は、夜勤はなしで日勤だけを担当することになった。

今日は金曜。平日のお昼前ということもあり、フロアは比較的空いている。彩乃が引き継いだ仕事を再度チェックしていると、ふと強い視線を感じた。
顔を上げて見ると、白のカットソーにジーンズ姿の雄一が、にこやかな顔で近づいてくるのが目に入った。

途端に心臓が喉元までせり上がってきた気がする。昨日のキスが頭に浮かぶ。

(なんでもない、なんでもない。彼はお客様、ただの……)

心の動揺を抑えつけるように、口元に微笑みを浮かべる。隣にいるフランス人の同僚シャルルは、常連客からの依頼を処理している最中だし、そうでなくても雄一のパーソナルコンシェルジュを仰せつかった以上、彼からのリクエストがあれば彩乃が対応するのが当たり前だ。

雄一は、たたくで持っていた新聞を振りながら、デスク前に到着した。

「やあ、昨日はどうも。俺のパーソナルコンシェルジュになってくれるそうだね。さっそくだけど、ひとつお願いがあるんだ。いいかな？」

目が合うと同時に、彼が口を開いた。デスクに軽く肘をつくしぐさが、憎らしいほど優雅だ。
「もちろんです。なんなりとお申しつけください」

日頃からお客様との距離感について気をつけてはいるけれど、彼に関しては通常よりも広めに距離を取ったほうがいいように思う。もちろん、物理的にも心理的にもだ。

彼のへーゼル色の瞳は、きつと彩乃だけでなく、多くの人を惑わせるもの。光の加減で色を変えるそれは、油断するといつ魅力入られてしまう。まったくもって危険極まりない。

「うん、実は今回取材を予定していたところが、ひとつだめになってね。奥多摩や国会図書館には

いく予定なんだけど、それだけじゃ足りない。君は東京が地元だっていうから、俺のために新たな取材先を考えてほしいんだ。派手じゃなくてもいい。なにかこう、心の奥底からわくわくできるようなレアな場所がいいな。ジャンルは問わないよ。いくつか見つけろって、できたら俺が帰ってくるまでに用意しておいて」

それだけ言うと、雄一はにっこりと微笑んで入り口へ歩いていく。軽装でカメラもなにも持っていないところを見ると、遠出ではないだろう。

できるだけ迅速かつ的確にリクエストに応える。それがコンシェルジュに求められることだ。それに今回のような漠然とした要求のときこそ、腕の見せ所だ。果たして彼は、どんな取材先を提示すれば喜んでくれるだろうか？

「よしっ！」

小声で気合を入れ、さっそく頭のなかに候補を思い浮かべてみる。雄一のパーソナルコンシェルジュとしての、最初の仕事だ。しかも、彼は彩乃が東京で生まれ育ったことを知った上でリクエストしている。彼の期待に応えなければ、そう思い、張り切って考え始めた彩乃だったが……

(あれ？ ……結構難しいかも)

改めて考えてみると、彩乃は自分が思っていたほど情報を持っていないことに気づいた。

雄一が求めているのは、〴〵心の奥底からわくわくできるようなレアな場所だ。彼はプロの旅行家であり、世界中が彼の舞台といえる。そんな彼が求める取材先とは……

彩乃は、彼の著書をくり返し読み耽^{ふけ}つてしまうほど、その内容に引き込まれている。だから彼が

人一倍好奇心旺盛^{ウツクシ}であることや、人とのコミュニケーションを重視することは十分わかっていた。そしてその取材スタイルが決して上^うつ^ち面^めなものではなく、真の密着型であることもきちんと感じ取っている。

ネットで検索して出てくるような情報ではなく、彩乃だからこそ提供できるようななにか——変に奇をてらったものではなく、取材する上で彼が心から楽しいと思えるようなローカルで価値のある取材対象——

彼は彩乃に、それを求めているのだ。名は知られていなくても、本当に面白くて興味がそそられる場所とは、どんなものだろう。

〴〵自分目線ではなく、お客様と同じ目線で考え、見ることに。

それは、以前エヴァンスがスタッフに言った言葉であり、彩乃が常に念頭に置いている教えだ。チェックインの時間を迎え、コンシェルジュデスクの前にもお客様が列をなす。いつもながらの目まぐるしさに追われつつも、彩乃はどうか数か所の取材先を準備した。

すぐに帰ってくると思っていたのに、雄一がホテルに戻ったのは、夕方になってからだ。ホテルに入るなり彩乃に視線を定め、まっすぐにコンシェルジュデスク目指して歩いてくる。

気持ちを切り替えて臨んだ彼からのリクエストは、決して簡単ではなかった。けれど、わくわくする楽しいものだった。実際に取材してもらえるなら、きつと満足してもらえる。そう思えるものをピックアップしたし、そうとなれば一刻でも早く雄一に披露したいと思っていた。

「おかえりなさいませ、桜庭様」

彼がデスクに手を触れるワントンポ前で、声をかける。

「ああ、ただいま。思いのほか帰るのが遅くなってしまった。東京って、やっぱり面白いね。たった二週間じゃ時間が足りそうもないよ」

屈託なく笑う雄一の顔は、まるで少年のように無邪気だ。

「そうですね、二週間なんてあっという間に経ってしまうかもしれませんよ」

我ながら驚くほどスラスラと返答し、用意していた資料をデスクの上に置いた。

「リクエストいただいた件について、いくつか候補を挙げてみました。桜庭様のご要望にお応えできればいいのですが」

彩乃からの提案は三つ。それぞれに必要なと思われる情報をまとめ、わかりやすいようにプリントアウトした写真も添付してみた。

雄一は、さっそくそれを開いて、軽く頷きながら見入っている。

「ありがとう。さすが俺のパーソナルコンシェルジュは頼りになるな。詳しく聞きたいから、後で部屋にきてもらえるかな？」

「はい、承知しました」

資料の入ったファイルを持ち、雄一は改めてにっこりと微笑むと、エレベーターホールへと歩いていく。

「気に入ってもらえそうですね」

隣にいるシャルルが、デスク内側で小さくガツポーズをした。中途採用の彼は年上だが、彩乃

の同期だ。彼は彩乃が写真をプリントアウトする間、進んで他の仕事を請け負ってくれていた。

「ありがとう。そうだといいんですけど」

お客様が途切れたタイミングで、バックルームにいるスタッフに声をかけ、雄一の部屋に向かうエレベーターには他に人はいない。彩乃は口を大きく開閉して、こわばった表情筋と、高まりつつあった緊張をほぐそうと試みた。

部屋のドアに近づき、軽くノックすると、すぐにドアが開いた。

「失礼しま——」

「待ってたよ。ちよつとこつちにきてもらえる？」

挨拶の途中でぐいと腰を抱かれ、部屋のなかに導かれる。

「は、はいっ」

戸惑いながらも、なんとか彼の歩幅に合わせて早足で歩いた。

「ところで、君のこと彩乃って呼んでいいかな？」

「あ、はい。構いません」

了承の返事しつつ、彩乃は動揺していた。常連のお客様のなかには、親しみをこめて名前で呼んでくれる人も何人かいる。だけどそれは外国からきた年配の人ばかりで、彼のように若い男性客からそんなふうに呼ばれたことは一度もない。ましてや、いきなり腰を抱かれるとは。だけど、不思議と違和感がないのは、やはり彼がイギリスで育ったせいだろうか。嫌悪感などまったくなく、むしろドキドキする。

クリーム色を基調とした部屋を横切り、窓辺に近づいたとき彼がある一点を指差した。窓の外はすでに夕暮れ時を迎えて、立ち並ぶビル群には赤いライトが点つている。窓が大きくとつてあるこの部屋は、外の景色がまるで一枚の絵画のように見えるのが特徴だ。

「あれ、見える？ あの青く光ってる建物。あれはなに？」

「はい、あれは四年前に建てられた電波塔で——」

目線が同じ高さになるまでかみこまれて、あやうく頬がくつつきそうになる。

また昨日のようなことになってはいけないと注意していたものの、あれこれ説明をするうちに、いつの間にも近づいてしまっていた。

「へえ、東京の十年はひと昔どころじゃないな」

気づけば、雄一の顔がすぐ横にあった。

（ち、近づい！）

これはいけない！ というか、非常にまずい。彩乃は慌てて軽く咳払いし、そのタイミングで雄一から身を離れた。

「あ、取材について聞く前にちょっとシャワー浴びてきていいかな？」

雄一は、すでにくろろげていた襟元を指差し、ほんの少し眉を上にあげた。

「そうでしたか。承知しました。ではまた改めてお伺いしますね」

そそくさとドアに向かおうとする彩乃を、雄一の腕がやんわりと制する。

「いや、せっかきでもらったんだし、できたらここで待っていてくれないかな」

「えっ、ここで……？」

「うん、すぐに終わらせるから大丈夫だよ」

彩乃に向けて軽くウインクすると、雄一はさつさとバスルームに入ってしまった。

（ぜんぜん大丈夫じゃないわよ！）

用があるとはいえ、シャワー中のお客様がいる部屋で待機するなんて、到底好ましいことではない。けれど彩乃の戸惑いをよそに、バスルームからは早々にシャワーを浴びる音が聞こえてきた。

気ままというか自由すぎるというか。勝手に帰るわけにもいかず、彩乃は所在なくその場に立ちつくした。しばらくすると、半開きのままのドアの向こうから、雄一の歌声が聞こえてきた。決して大声ではないのに、ひとつひとつの音が部屋のなかに広がる、のびやかでよく響く声だ。その美

声に誘われ、気づけば彩乃はバスルームのほうに歩を進めていた。歌声は、これまで彼が話していた日本語ではなく、綺麗なクイーンズイングリッシュだ。

その歌に聞き覚えはまったくないけれど、どうやら甘く切ない恋の歌らしい。耳をそばだてているうち、彩乃はいつのまにか目を閉じていたようだ。はっと気がついて目を開けた瞬間、バスルームのドアが大きく開いた。

「わっ！」

慌てて飛び退ったけれど、ほんの少しドアに額をぶつけてしまった。

「うわ、どうした？」

「す、すみませんっ！」

謝りながら頭を下げると、またゴツンという鈍い音が聞こえてきた。

「いっ……」

思わず声が出そうになるも、どうにか抑えこんで平静を装う。

なんとという失態だろう！ 一度ならず、二度までも、ドアに頭をぶつけてしまうなんて。

「頭打つたら。大丈夫か？」

問いかげられ、キツツキのようにうんうんと頷いて見せた。

「そうか。じゃあよかつたけど……。でも、なんであんなところに立ってたんだけ？」

聞かれて当然の問いに、つい口ごもって視線をそらした。

「えっと……。あの、ドアが……。ドアがちゃんと閉まってなかったの！」

とってつけたような言い訳だけど、一応事実だし、嘘はついていない。いつもの倍以上努力して口元に微笑みを浮かべ、どうにか視線を彼に戻す。

「ふうん？ どれ、一応見せて」

躊躇する隙も与えられず壁際に追い込まれ、温かな手で前髪をかき上げられた。

「ちよっと赤くなってるけど大丈夫かな……。うん、やっぱり可愛いおでこちゃんだ」

指先でそっと額をなぞられ、昨日のキスの感触を思い出してしまった。

ヤバイ。このままではいけない。頭のなかに浮かんでくる生々しい記憶を振り払おうと、彩乃は極力明るい声で雄一に話しかけた。

「あの、さつきバスルームで歌ってらした曲……。あれは、なんていう曲なんですか？」

「ああ、あれ？ 俺が好きなのイギリスの古い歌だよ。歌詞の内容もいいだろ？ 愛し合うふたりが、初めて会ったときのことを歌ってるんだ」

雄一は、簡単に曲の解説を始めた。日本ではあまり知られていないものの、愛する人の顔を初めて見たとき、初めてのキス、初めて結ばれたときのことを歌ったその曲は、イギリスでは愛を歌うスタンダード曲になっているという。

「とてもいい曲ですね。それに、あの……。すごく素敵な歌声でした」

言いながら、耳朶が痛いほど赤くなっているのがわかった。

「ははっ、それはどうもありがとう。ホテルだし、あんまり大声をだしたら怒られるかな？」

「ここは防音がいっしょかりしているので、たいいの音は大丈夫です。……。実はさつきドアに近づいていたのは、桜庭様の歌声をもっとちゃんと聴きたいと思ったからなんです」

本来であればお客様相手に言うことではないだろうが、雄一の歌声があまりに素敵だったせいも、気づけば彩乃はそう口にしていた。正直に話してしまうと、なんだかすうつと気持ちが悪くなった。

「そういえば、本のなかに現地の人たちを前に歌声を披露したエピソードが載っていましたね。あのときも今の歌を歌ったんですか？」

驚いた表情を浮かべる雄一に、彩乃は彼の著作をくり返し読んでいることを伝えた。

「ああ、そうだよ。……。しかしびっくりしたな。俺の本をそこまで細かく読んでくれたとは」「すごく面白かったです。あんなふうに旅ができたらって思いました。それに、たぶん自分では一生いけそうもない場所にも、実際にいったような気分になりました」

彩乃の顔をじつと見つめていた雄一だったが、ふつと目を細めて指で顎の先をしごいた。途端にどきりと彩乃の心臓が跳ねた。

よく見ると、まだ濡れている髪から、Tシャツを着た肩に水滴が落ちている。水も滴るいい男——そんな言葉が頭の中に思い浮かんだ。なんだろう、このイケメンぶりは。

(いけない。油断しちゃだめだ)

なかつたことにしたとはいえ、彼は彩乃の初めてのキスを奪った男だ。

「嬉しいことを言ってくれるね。それは、コンシェルジュとしての君の感想？ それとも、桂木彩乃個人としてのものかな？」

やや前かがみになっている彼の瞳が、彩乃を見つめる。急にフルネームで呼ばれて、身体に衝撃が走った。しつとりと濡れた睫毛が、照明の下できらきらと輝いている。秀でた眉、まっすぐな鼻筋。弧を描いた唇が、やけに肉感的に思えてきた。

あまりにも強い視線に晒され、彩乃の頬はみるみる赤く染まる。見つめ合った目をそらすことができずに、壁に背中をつけたまま身体を硬くした。

「ど……どちらも、です。正直、最初は桜庭様に関する情報収集のために読んでいました。著名なお客様をお迎えする場合は、できる限りそうやって事前にその方のことを知っておくんです。でも、すぐに本そのものに引き込まれて、いつの間にかくり返し読むようになっていました」

話しているうち、自分でもなんでこんなに饒舌なんだろうと不思議になる。だけど、一度話し始

めると、伝えたいことが次々に出てきて、もう止まらない。

「それまで読んでいた本もあつたんですけど、それもほつたらかしくなっています。なんでもっと早く読まなかつたんだろう、ベストセラーになっていたことは知っていたのに、って。そんなふうの後悔するほど面白くて……」

雄一は、下ろしていた手を上げてもう一度彩乃の額に触れた。前髪が持ち上がり、彼の唇が額の真ん中にそつと押し当てられる。

湯上がりのせいとか、とても温かで柔らかい。

唇にキスをされたときはどうだっただろう？ もつと硬かつたような気がするし、もつと濡れていて別の意味で熱くて——

「なおさら嬉しいな。彩乃はよく本を読むの？」

「えっ？ あ、ああ、はい。どちらかといえばよく読む方かと」

雄一は、彩乃の返事に満足そうな笑みを浮かべた。その笑顔に、彩乃ははつと我に返る。

「そうか。さあ、立ち話はこれくらいにして、向こうへいこうか」

(ちよ、ちよつと待って！ 今のはなんだつたの?)

あれほど気をつけていたのに、いつの間にかまた額にキスをされてしまっていた。

またしてもピンチだ。今のこの状況は普通じゃない。いくらイギリス育ちでも、これは明らかにおかしい。こんなこと道徳上よろしくない。もしかして、このまま押し倒されたりしたら——。冗談じゃない！

「あのっ……」

なにか言わなくては、と彩乃は口を開いたが、雄一には届かなかったようだ。彼は資料が置いてあるデスクまで歩いていき、そこに椅子を二つ並べた。

「さてと。じゃ、さっき聞いた取材先について、詳しく教えてくれる？」

「えっ……は、はい！」

さっきの甘やかな空気はもうそこにはなく、雄一は仕事モードに切り替わっている。

この気持ちをごにぶつければ——と若干の肩すかし感を味わいながらも、彩乃はなんとか気持ちを切り替えて雄一の隣に座り、資料の説明を始めた。

雄一は熱心に聞き入り、時折質問を交えつつなにかしら書き込みをしている。これまでとは打って変わった真面目な表情の彼に、彩乃はまた違った意味でどきりとした。あれほど素晴らしい旅行記を書く人なのだから、仕事に対する姿勢が真摯なのは当たり前だ。だけど、さっきまでの軽い態度の後では、どうしてもそのギャップに驚いてしまう。

しかもびつくりすることに、雄一は思った以上に日本文化に精通していた。彩乃に対する質問から、彼の深い知識が感じられる。そんな彼を知るにつれ、彩乃は自分の提案にまったく自信が持たなくなってしまう。

「あの……、もし的外れな情報でしたら遠慮なくおっしゃってください。もう一度最初から考え直して——」

すると、雄一がふいに顔を上げた。それまで一文字に結ばれていた口元がほころび、彼の顔に満すると、雄一がふいに顔を上げた。それまで一文字に結ばれていた口元がほころび、彼の顔に満
足そうな微笑みが浮かぶ。

「いや、すごく気に入ったよ。特に、これがいい——明後日ある神社のお祭り。すごく風情がありそうだし、日程的に申しぶんない。まさにグッドタイミングだ。ここを取材先に選ぼうと思う」

「ほんとうですか？」

雄一が、自分の提案を気に入ってくれた。プレイボーイで軽い男ではあっても、彼は世界的に有名な旅行家だ。その彼に認められたことは素直に嬉しいし、気持ちが高揚するのも無理もなかった。

よほど嬉しそうな顔をしていたのか、彩乃を見る雄一の表情が、より一層笑顔になる。そこから、自然と会話が弾んだ。

「ここは彩乃が生まれ育った町なんだね」

雄一が、印刷した地図を指さす。そこはお祭りがある神社を囲む地域で、歴史も古くちよつとしたレトロ感が味わえるエリアだ。

「はい、そうです。昔からの町ですから、歩いているだけでも面白いと思います」

「そうか。取材の許可は誰に取ったらいい？」

問いかけながら見つめてくる瞳に、また心臓が跳ねる。ヘーゼル色には違いないけれど、光の加減で濃緑色に近くなったり、金色がまじったりする。美しい瞳を持つ人はたくさんいるけれど、こんな不思議な色合いの瞳は初めて見た。思わず見入ってしまいそうになり、彩乃は慌てて視線を地図に戻した。

「お祭りを実質的に取り仕切っているのは、町会長です。昔から家族ぐるみの付き合いをしていま

すから、私から町会長に連絡を入れておきます」

祭りのある神社は、規模は小さいが大正年間に創建された由緒あるものだ。彩乃は小さいころ、よくそこで遊んでいた。祭りともなれば楽しみすぎて、前夜眠れないほどだったことを覚えている。「この日、君は二時半からの勤務だったね。終わるのが十一時となると、お祭りにはいけそうもなかな」

雄一の眉が、いかにも無念そうに八の字を形作る。彼のパーソナルコンシエルジュということで、彩乃の勤務表はすでに渡してあるのだ。

「そうですね。ここ何年か、仕事の都合で参加できていませんし、今年も無理そうです」

「残念だな、時間が合えば同行してもらえたのに」

僅かに口を尖らせた表情に、さらに心拍数が上がる。

本気で言っているとは思わないけれど、まったく心臓に悪い。別段彼に恋心を抱いていなくても、心に刻んでしまうほど印象的な顔だ。

それにしても、彼はなんて表情が豊かなんだろう。その時々感情や思いが、わかりやすくこちらに伝わってくる。彼に比べたら、自分なんか無表情に等しいんじゃないかと心配になる。

元々彩乃は、さほど表情が豊かではない。普通に笑ったり怒ったりもするけれど、どちらかといえば感情を内に秘めるタイプだ。別にわざとそうしているわけではないけれど、普段からそうだし、今のところそれで困ったという覚えはない。

そんな彩乃でも、雄一を前にすると普段通りではいられない。感情は乱れっぱなしになるし、と

てもじやないけれど表情まで管理できなくなってくる。あまりにも衝撃的な体験をさせられ、すっかり感情が振り切れてしまったのだろうか。いつもより瞬きが多くなっているし、仕事の中もかわらず表情に喜怒哀楽が表れてしまっていることに気づいていた。

それが自分でもわかるくらいだから、雄一には間違いなく伝わっているはずだ。彼は彩乃を、いったいどういう気持ちで見ているのだろう。

(だって、初対面からあんなだったし。突然キスもされたし。普通そんなことしないよね？ 驚いて当たり前だし……ああ、私、今どんな顔してるんだろう……)

彩乃がそう思う間も、雄一は熱心に資料を眺めている。

「これは着物だよな？」

写真の一枚を指差し、雄一が尋ねた。彼の指先には、半被を着て神輿を担ぐ人々が写っている。「これは半被といって日本の伝統的な衣装です」

雄一は、大学の四年間を東京で過ごしたが、勉強に明け暮れていて、あまり余暇を楽しむ暇がなかったらしい。

「多少旅行もしたけど、忙しくてものすごい駆け足だったんだよ。在学中はとにかく勉強を最優先にして、好きな旅行は卒業後に回そうと思っただけ」

それからしばらくの間、半被についてあれこれと説明が続いた。途中質問をされ、そこから浴衣や袴にまで話が広がる。半被とは違い、着物ならば雄一もある程度の知識は身につけていた様子だけれど、着付けのを始め、細かなことについてはやはり知らないことも多くあるらしい。

できる限りわかりやすい説明を心がけつつ、彩乃は今さらながら、もっと日本について勉強するべきだと痛感していた。

「なるほど。日本にはいろいろな用途の着物があるんだな。四年も日本にいたのに、服飾についてはぼーっとしたよ。しかし、ますます君と一緒に祭りに行けないのが残念だ。いくときはやっぱり浴衣を着るんだろう？」

「はい、母が着付けをやっていたので、昔からお祭りにいくときは必ず」

「そうか。あーあ、君の浴衣姿が見たかったなあ」

雄一が、大げさに声を上げて椅子にもたれかかった。彼の何気ない軽口に反応して、彩乃の頬がほんのりと桜色に染まる。もう九月とはいえ、その祭りには浴衣で参加する人も多くいるのだ。

「そんな……期待されるほどのものではありません」

それ以上どう言えばいいのかわからず、視線を落とし口をつぐむ。

「謙遜することはない。彩乃は色白だし、日本の伝統的なものがとても似合いそうな顔立ちをしている。機会があれば、ぜひ君の浴衣姿を見せてもらいたいな」

ややトーンを落とし気味に囁かれて、彩乃の頬は痛いほどの熱を持った。

「じゃ、取材許可の件はよろしく頼むよ。いい取材先の提案をありがとう、感謝するよ。ところで、もうひとつ質問があるんだけど——彩乃は、今恋人はいるのか？」

いきなり投げかけられた質問に、ぽかんと口を開けてしまう。

恋をしようと言って、いきなりキスマスまでしてきたというのに。

なぜ今さら恋人の有無を聞くのかわからない。いようといまいと、関係なく振る舞ったのではないのか？

「いません。それがなにか」

気が動転して、若干答え方がぶっきらぼうになってしまった。それに気づいたのかそうでないのか、雄一は大きく頷いた後、軽く咳払いをした。

「いや、ちょっと確認しておきたかっただけだ。ありがとう、君の協力に感謝するよ」

部屋を後にした彩乃は、またしても非常階段を下りながらぶつぶつと文句を言う。

「恋人がいるかいないかの確認ってなによ!? どういうつもりで、いったい……」

デスクに戻ると、シャルルに代わり、シフトに入っていた袴田が気づかわしげに話しかけてきた。

「大丈夫？ なにか問題でも？」

「あ……、はい、大丈夫です」

「そうか。いや、なんとなく表情が険しいから、なにかあったのかと思って」

さすが袴田だ。ちょっとした表情の動きで彩乃の心の乱れを感じ取ってしまった。

「そうですね？ ありがとうごさいます。さっきここへ戻るときにちょっとつまずいてしまった……。結構驚いたので、そのせいです、きつと」

袴田に笑顔を向けてから、彩乃は町会長に連絡を入れた。快く取材許可をもらい、早々に雄一の部屋に連絡を入れる。

『ありがとう。君を俺のパーソナルコンシェルジュに指名してよかった』

耳元に聞こえる彼の声に、いったん治まっていた熱が戻ってくる。それはじんわりと首元に上り、花が水を吸うようにみるみる頬に広がっていく。

（なに？ なにを赤くなっているの？ 過剰反応もいいとこだし！）
雄一に会ってからのというもの、なにかと調子が狂う。感情の起伏が普段よりも激しくて自分自身もてあましぎみだ。

きつと今は、認められて褒めてもらったことで、つい舞い上がってしまったのだろう。耳朶みみたぶに発生し、いつの間にか胸のなかにまで入り込んできた熱は、きつとそうに違いない。いや、絶対にそうに決まっている。

——評価されたことを素直に喜ぼう。それ以上でも以下でもなく、ただそれだけを。

唇へのキスと同様、額ぬでへのキスもなかったことにしよう。彼にとつてはほんの挨拶あいさつレベルだろうし、いちいち反応しては面倒なやつと思われてしまいそうだ。

だけどそう思ってはみたものの、彩乃の頭のなかには雄一のヘーゼル色の瞳が、いつまでも消えないで残っていた。

ホテルは、二十四時間、三百六十五日営業し、常に万全の態勢でお客様を迎えている。

スタッフは基本的に週休二日だが、休みとなる曜日は固定されてはいない。雄一がきて三日目にあたる土曜日、彩乃は丸一日休みだった。睡眠と読書に一日を費やし、翌日の日曜日。彩乃は日勤三番目のシフトに入るべく、十四時過ぎにホテルに出勤していた。

今日は雄一がお祭りの取材に行く日だ。昨日は終日雨模様だったけれど、今日はまずまずの天気だ。

朝一番のシフトだった袴田から、業務の引き継ぎを受ける。

「桜庭様はもう神社に向かわれた。終電の時間を気にしておられたので、だいぶ遅くまで取材する予定だと思う」

「そうですね。お天気が持ち直してよかったです」

何気なく返事はしているが、実のところ昨日は一日中今日の天気になって仕方がなかった。今朝一番で町会長に連絡を入れ、祭りが開催されることを確認しつつ、もう一度雄一の取材に協力してもらえようくれぐれもお願ひしていた。

『世界的な旅行家なのよ。すごく面白い文章を書く人だし、ぜひこの取材を成功させてもらいたいの』

電話口で熱っぽく語る彩乃に、町会長は呆れ気味だった。

『へえ。えらく熱心だね。その人は、彩乃ちゃんの彼氏かい？』

慌てて否定するも、町会長は妙な含み笑いをして電話を切ってしまった。

仕事をしながらも、頭の隅で雄一や祭りのことがずつと気になっている。

雄一の著作からは、彼がどれほど旅を愛し、人々との出会いを楽しんでいるかが窺うかがえる。彼が綴つづる文章には、そこにいつてみたいと思わせてしまう力がある。

そこに、彩乃が提案したお祭りが描かれるとしたら？ それはなんて魅力的なことだろう。